甘い思い出

栗山学子

お酒はあまりいただけませんが、コーヒーや紅茶は、もともと大好きでございました。この頃は、普段は紅茶を主にして、コーヒーの方は疲れた時の気つけ薬のつもりでのむことにしております。魔法罐に詰めて出て、楽屋でも、放送局のスタジオでも、これはという時に頂くのでございます。

コーヒーについては、いろいろ懐しい思い出がございます。

まだ私が若かった頃、パリに行っておりまして、毎朝、ベッドに運ばれて来た、大きなカップに満たされた香り高いコーヒー。その温かいカップを傾け、一しょについて来たパンもちょっと頂くと、ほんとうにはっきり眼がさめたような気分になったものでございました。まだ若かった私には、それがなんとも言われぬ喜びでございました。

街を散歩してちょっと疲れたとき、カフエの椅子に腰かけていただく一杯のコーヒーのおいしさ。それもなつかしい思い出でございます。そういうお店はあまり高尚過ぎもせず、といってあまり大衆的でもなく、ちょうど自分の生活

と同じようなお店が望ましいものでございます。この頃の私はあまり街を歩くこともなくなりましたが、戦争前の銀座やコロンバンのお店など、よく参りました。コロンバンのお店が綺麗であったこと、しゃれていたことなども、魅力でございました。それに、あの可愛らしいお菓子がおいしうございました。

カフエの楽しみには、また、気のおけないお友達と語り合う楽しみもございます。映画やお芝居を観た帰りなど、そのままま直ぐに家へ帰ってしまうのは、惜しいような気がするものでございます。そういうとき、気のあったお友達が一しょだったら、そういうカフエの一隅で、まだ新しい昂奮や感激を語り合う楽しさは、またひとしおでございます。おいしいコーヒーと、それに釣り合うお菓子を頂きながら、語り合っているうちに、だんだんと心が落ちついて行くのでございました。

でも、たったひとりでも、そういう帰り道や、買い物のついでなどには、やはりカフエに立寄りたいものです。近頃は忙しさにとりまぎれ、しばらくそういう気分から離れておりました私も、これからはまた気軽にお店に寄せて頂きたいと考えるのでございます。

（俳　優）